

アダム・スミスの道徳哲学とレトリック (中)

On Adam Smith's Moral Philosophy and Rhetoric (2)

平野 英一

Eiichi HIRANO

はじめに 問題へのアプローチ

第1章 スミスの『修辞学・文学講義』と道徳哲学との関わりをめぐって

1. 『修辞学・文学講義』の概要
2. 『修辞学・文学講義』についてのこれまでの論考について

第2章 スミスの思想体系における『修辞学・文学講義』と道徳哲学との関係をめぐって

1. ブラウンによるスミスのテキスト解釈
2. 公平無私な観察者と良心のストア的モデル
3. スミスの徳の体系のストア的ヒエラルキー

〈以上 (上) 第6集、2002年3月〉

第3章 『道徳感情論』のレトリック

1. 『道徳感情論』にみられるレトリックの諸要素
2. 批評家と劇場

〈以上 (中) 本第8集、2004年3月〉

第3章 『道徳感情論』のレトリック

第2章において、ブラウンの所説を検討して、スミスによるストアの受容と批判の核心が道徳的判断における理性と自然に対するスミスの懐疑にあること、そしてこの問題を掘り下げていくことが、スミスにおける道徳哲学とレトリックとの関連を、言い換えるならばスミスにとって道徳を言説化するとはどのようなことであったのかという問題を、一層明瞭に照らし出すことになると指摘した。

本章では、すでに述べたようにグリスウォルトの論考がそうした掘り下げに多くの示唆を与えてくれると思われるので、彼の示唆を中心にしながらスミスにおける理性、自然、および懐疑論の問題がどのようにレトリックとかかわるのかという論点に向って考えていきたい。

1. 『道徳感情論』にみられるレトリックの諸要素

グリスウォルトは、倫理を行うことはどのようなことか、また倫理を理論化するとはど

のようなことか、についてのスミスの構想こそが、彼の道徳哲学の理論化にあってレトリックを本質的に要請していると考える。こうした観点から彼は『道徳感情論』の中に見られるレトリックの諸要素として、特に(1)説得的な(protreptic)一人称複数「われわれ」の使用、(2)例証の演じる役割、(3)『道徳感情論』のレトリカルな記述編成、を指摘している。そこで以下、それらの点について順に考察していきたい。⁽¹⁾

(1) 説得的な(protreptic)一人称複数「われわれ」の使用

すでに前章のブラウンの所論を検討した際に見たように、『道徳感情論』の論述は一人称単数の「わたし」および複数の「われわれ」、二人称単数および複数「あなた、あなたがた」が多用され、それらのパースペクティブ(あるいは諸々の声)が交差し、相互作用しながら進められる。「わたし」「われわれ」は行為当事者でもあったり観察者でもあったりする。ときには「あなた、あなたがた」も行為当事者でもあれば観察者としてでもある。さらに「われわれ」は当該の状況から距離をとって観察し評している哲学者、理論家の視座をも表わす場合もある。こうしたスミスの人称代名詞の使用の中で特に一人称複数「われわれ」が頻繁に使用されていることをグリスウォルトは重視して、スミスの論述は説得的(protreptic)なそれである、と言う。つまりそうした代名詞を使用することによってスミスの論述は、「われわれにものごとをある特定の仕方で見ること、そして時にはある特定の仕方です行なうよう促し、また説得することを意図しているという意味でprotrepticである」と言う。⁽²⁾それは、「道徳を理論化することについてのスミスの考え方を、特に倫理学は相互応答や、説得しようとする理由提示の責任や、拳証責任などの文脈を想定する社会的実践である、という彼の考え方を表わしている。すなわち、われわれは倫理について外的なパースペクティブからは理解できないのであって、哲学的に倫理について語るることができるのは、ただ想像力によって他者の状態の特殊性に入り込むことができ、公平な判断を生み出せるような人びとだけなのである。道徳感情の理論は倫理実践に依拠してなければならず、説得的な社会的実践の一形態である。その説得は、われわれが日常的に自己理解していることのなかに暗黙裡に含まれている共通の基盤から次々と起こる疑問や問題の反省を経ながら築き上げねばならないのである。

(2) 例証の演じるレトリック的な役割

グリスウォルトがスミスのレトリックの要素として次に指摘するのは、『道徳感情論』において多数の例証の演じてレトリカルな役割である。周知のように『道徳感情論』は例証に満ちている。文学や演劇(特に悲劇)から引き出されたもの、あるいはスミス自身がつくった短い物語などが例証として多用されている。そうした例証によってわれわれの注意はその例でもって語られる特殊なものの経験へと引きつけられ、想像力の働きを活気づけられて、問題となる状況と動因などを理解するように仕向けられる。スミスは、倫理的状况を適切に理解し、評価するためには、われわれの情緒はその文脈の特殊性に関わらねばならないということを伝えるために、さまざまな例証の使用を考案したのである。スミスは、われわれは状況の特殊性を考慮することによって道徳的判断にいたることを次のように述べている。

「諸行為の道徳的適正または不適正、功績または罪過は、特定の事例についてのみこれ

を明確に識別できるのである。われわれが、われわれ自身の抱くこのような二種の性向と行為者の抱くそれとの間にある一致または不一致をはっきり知覚する、あるいは前者の場合にはその行為者に対して社会的感謝の気持ちが起こるのを感じ、後者の場合にはその行為者に対して同感的報復感が起こるのを感じるのは、特定の事例が与えられる時に限られる。徳もしくは悪徳を抽象的な、一般的な方法で考察する時には、そうした徳や悪徳が上にのべたような各種の情感を刺激する諸性質は大部分消えうせてしまうように思われ、情感それ自体はますます曖昧になり識別がつかなくなってしまうのである。」⁽³⁾

(3) 『道徳感情論』のレトリカルな記述編成

『道徳感情論』では、その冒頭の第一部からいきなりわれわれ読者はさまざまな具体的な状況の中に投げ込まれ、同感という想像力を働かせた道徳的判断をするように促される。そうして最後の第7部（初版から5版までは第6部）にいたってはじめて、われわれが道徳について何を中心的に問題にしてきたのかが、道徳哲学のこれまでの歴史についての理論的眺望があたえられることによって、整理される。われわれはこの最後の段階になって道徳感情の理論が大きく言って二つの問題をあつかっていることが知らされる。第一の問題は、「徳はどこに存するか」という徳論についての問い（「徳の本性に関する究明」）である。第二の問題は「精神はどのような力ないし力能によってこの性格がわれわれによって求められるのか、といういわば道徳心理学についての問い（「明確な是認の原理に関する問題」）である。さらにスミスによれば、後者の問題は「思弁の上では最大の重要性をもつかもしいないが、しかし実践の上ではなんら重要性をもつものではない」のである。それに対して、前者の問題、つまり「徳の本性に関する問題は、多くの個別の場合において、正邪に関するわれわれの観念に必然的にある種の影響を与える」のである。後者の問題、「是認の原理に関する問題」、つまり「われわれの心の内部におけるどんな仕組みまたは機構にもとづいてそのような異なる観念もしくは情操が生ずるか、ということの研究する」ことは、われわれの観念にそのような影響を与えることはできず、単に「哲学的な好奇心の問題」にすぎないとされる。⁽⁴⁾

なぜこのような論述構成がなされているのか、これまで『道徳感情論』については多くの論考がなされてはきたが、こうした問いが立てられて、それに対する掘り下げた論考はなされてはこなかった。グリスウォルトの考察ははじめてこの問題の持つ意味の重要性について興味深い示唆を提供してくれる。彼はこのような第7部の配置、およびそこでの記述のされ方に、スミスによる道徳の理論化についての理解が、そのレトリック的配慮となって表わされているのを見る。それは端的に言えば、道徳へのアプローチは、日常の道徳的行為者の前-哲学的な自己理解と経験の反省によって導かれなければならないというスミスの道徳哲学への構想にもとづくものである。この点については後にまた触れることにして、さらに第7部の記述内容においていくつかの注目すべきスミスの配慮がなされているというグリスウォルトの指摘を引き続いてみることにしよう。

グリスウォルトは、第7部におけるこれまでの道徳哲学の歴史的展望に関するスミスの記述において二つの注目すべき問題を指摘する。一つはそこで採り上げられた先行の道徳哲学者たちの議論の取り上げ方であり、もう一つは、それらの哲学者たちに対するスミスの批評の主眼点である。

前者の問題に関わる問題は、スミスが先行の哲学者たちの道徳理論に関して論じているなかに注目すべきいくつかの沈黙があるということである。例えばプラトン、アリストテレス、あるいはストアなどのような古代の哲学者たちの倫理学を論評する際に彼らの形而上学的な教説部分にはまったく触れていないように、総じて彼ら先行者たちの認識論的および形而上学的見解についてはほとんど関心を向けていないのである。「彼はあたかも倫理学がそうした領域から独立に着手されてきた学問分野であるかのように論述を進めている。」⁽⁵⁾

さらに重要で、驚くべきスミスの論評上の省略と思われるのは、懐疑論について完全に沈黙していることである。しかしスミスの時代には、P・ベイル、G・パークリー、さらにスミスの親友であるD・ヒュームらによって、認識と道徳に関する懐疑論の問題は最も重要な問題として多いに論争されて、懐疑論の話題に満ち溢れていたことを考えるならば、第7部における道徳哲学の歴史的、批判的概観においてこのように古代および近代の古典的な懐疑論者たちの議論が完全に省かれていることは、スミスがその問題の扱いに関して熟考の上で意図的にそうした配慮をなしたと考えられねばならないであろう。

以上のような認識論と形而上学的議論と懐疑論的議論の意図的と思われる省略をどのように考えるべきか。そのような省略には道徳の理論化に関して、道徳的判断における理性の制限された役割についてのスミスの考えと、それに関連するかれの懐疑論的見解が深く関わっているのではないかという推定が成り立つように思われる。グリスウォルトはこのようなスミスのインプリシットな配慮に対比して、そうした推定に対してよりイクスプリシットな示唆を与えてくれるのは、これまでの哲学者たちの道徳諸理論に対するスミスの論評の仕方である、という。

これまでの道徳哲学の諸学説に対するスミスの批判的論評は、その全般的な論理としては、<それらの諸見解は不正確である。なぜならばそれらは日常的な道徳的行為の自己理解を正当に扱っていないから>、というものである。スミスは、これまでの哲学者たちがそのように陥る誤りを、大きく言って二つタイプに分けて、批判している。

まず第一に、そうした哲学者たちが、道徳の諸現象を自らの体系に力づくで適合させることによってそうした現象を破壊してしまう、という彼らの還元主義的な仕方への批判である。

たとえば、徳とは慎慮であるとしたエピクロスに対しては次のような批判がなされる。「エピクロスは、あらゆる異なる徳をもまたこのような一種類の適正に還元したのであるが、その場合彼はすべての人間が本来持っているが、しかし特に哲学者が自分達の優れた才能を披露するうえで最大の手段としてことさら好んで涵養しようとしがちな一つの性向、すなわちあらゆる現象をできるだけ少数の原理にもとづいて説明しようとする性向に耽溺した」⁽⁶⁾

またクリュシッポスは、ストア派の教義を学者じみた専門的な体系に還元してしまったことで、またハチソンはすべての徳をたった一つの仁恵に還元してしまったことで、それぞれが批判されている。⁽⁷⁾

特にスミスがこうした批判を向けて多大に論及しているのはマンデヴィルとホブズに対してである。マンデヴィルとホブズは、ただ自己愛のみが道徳的感情の全領域を説明できると主張したが、それに対しては、次のような批判がなされている。

「同感はいかなる意味においても利己的な原理と見るわけにはいかない。わたしがあなたの悲しみまたはあなたの憤激に同感する場合、事実わたしの情感は利己心に根ざしているといわれるかも知れない。なぜならそのような情感は、あなたの事情を私自身によくわからせ、私自身をあなたの立場に置き換え、その上で同じ境遇におかれるならばわたしは当然いかに感ずべきであろうか、ということを理解しようとするがために生ずるからである。しかしながら、同感が当事者と想像の上で立場を取り換えることから生ずるというのはきわめて適切ではあるけれども、しかしこの想像上の交換が私自身の身の上なり、また私自身の役割なりについて起こるように考えられてはならないので、むしろわたしが同感する相手方の人間の身の上なり役割なりに関して生ずるように考えられねばならない」⁽⁸⁾

またスミスはホブズに対して、徳は善であるということの彼の帰結主義的説明について批判を加え、次のようにも述べている。

「徳が社会の秩序を促進する傾向をもち、悪徳が社会の秩序を妨害するという事実は、われわれがこれを冷静に哲学的に考察する場合には、特に大してきわめて大きな美を与え、悪徳に対してはきわめて大きな醜さを与えるのであるが、このことに対しては、わたしは…疑問をさしはさむことはできない。われわれが人間社会をある種の抽象的な、哲学的な観点から考察する場合には、それはあたかも規則正しい、調和のとれた運動が無数の快適な結果を生み出す一種の廣大無辺な機械のようにみえる。…是認と否認の根源に関するこのような説明は、それが社会の秩序に対する配慮にこのような根源を求めようとするかぎりにおいて、効用性に美を求めようとする原理…と区別がつかなくなる。そしてその学説がもっともらしく見える面があるとすれば、それはすべてこのような点からきているのである」⁽⁹⁾

つまりスミスの批判の趣旨は、こうした還元主義的で帰結主義的説明は理論的および非個人的な観点をとる観察者には明白に思われるかもしれないが、道徳行為者としてのわれわれは、社会的効用のために徳を促進させ悪徳を禁じたりはしない。そのような総観的ないし抽象的な視座が取られると道徳にとって正常な＜内側からの視座＞が見落とされるということである。

第二にスミスによればこうした還元主義に加えて、哲学者達が陥りやすい誤りは、道徳行為者の視座と理論家の視座とを、前者を消滅させるような仕方で混同することである、としてその種のタイプへの批判がなされている。ストア派の教説に対してはこの種の誤りにかかわるものとして批判がなされている。

「ストア派の賢人は、宇宙の偉大なる管理者の見解に移入し、かの神聖なる存在が事物を眺めようとするのと同じ見方をもってそれらの事物を眺めようと努力した。…われわれの欲求と嫌悪、希望と恐怖、喜びと悲しみを自然に引き起こす諸原因は、あらゆるストア哲学の論証にもかかわらず、それぞれ個人の上に、その個人のもつ感受性の強さの度合いに応じて、それらの原因の適切にして必然的な結果をもたらすものであることは疑いえないであろう」⁽¹⁰⁾

こうした誤りは、説明されるべき現象を一種の幻想にまで変えてしまうほどに還元が徹底される場合に現れてくるものとしてマンデヴィルの＜利己愛＞への批判がなされているのはすでにみたとおりである。

スミスにとってこれらさまざまな還元は、道徳性に対する哲学的考察の正しさを検証す

べき唯一の根拠、つまり日常的な道德行為者の自己理解に耳を傾けるというよりもむしろ彼ら自身の体系的な要求、一往々にしてそれは美的要求であるが—に傾斜する哲学者の考案である。このスミスの批判の主眼は第7部のみならず、『道德感情論』の初めからほのめかされてなされているヒュームの道德哲学への批判的対決点でもある。

すなわち『道德感情論』のはじめのところではヒュームの道德論の効用主義的側面をほのめかしながら次のようにいう。

「それらの資質の効用が、まずそれらをわれわれに好ましいものと思わせると考えられるかもしれない。…しかしながら、本来われわれが他人の判断を是認するのは、その判断が何かに役立つからではなく、それが正しく確かで、真理と現実に合致しているからである。そしてその判断がこれらの特性を備えているとわれわれが認める理由は、その判断がわれわれの自身の判断に一致するからである。…すべてこのような種類の資質の持つ効用に関する観念は、あきらかに後から考えられたものであって、それは最初にこのような資質に対してわれわれの是認を求めるものではないのである」⁽¹¹⁾

さらに第4部においても次のようなヒューム批判が再説されている。

「種々の性格がその有用性もしくは有害性にもとづいてもっているように思われる美しさと醜さは、人類の諸行為と行動とを抽象的で哲学的観点から考察する人びとに対して特に強い印象を与えやすい。…しかし、諸行為の適正と不適正、功績と罪過は、特定の事例についてのみこれを明白に識別できるにすぎない。…徳ないしは悪徳を抽象的な、一般的な方法で考察する時には、そうした徳や悪徳が情感を惹き起こす諸性質は消えうせてしまうように思われ、情感それ自体はますます曖昧になり識別がつかなくなってしまうのである。…なぜ効用が快感を与えるか、という問題をはじめて解明したのと同じ俊敏な、共鳴できる著者はこのようなものの見方に非常に強く支配されていたので、徳に対するわれわれのすべての是認を、効用性の出現によって生ずるこの種の美の知覚に還元してしまったのである。」⁽¹²⁾

こうした先行の哲学者たちが陥った陥穽に対するスミスの批判的評言を考慮するならば、スミスの道德の理論化にあたっての注意がなによりも、いかに日常的な、前—哲学的道德行為者の視点を失わずに保持しつつ、非個人的な、客観的な立場をとる上に必要な理論を提示していくか、という問題に向けられていたこと、そのためにこそ上に見たようなレトリックが構成上本質的に要求されていることが見えてくるといえよう。

グリスウォルトは、ここにうかがわれるスミスの道德の理論化へのアプローチについての理解は、三つの点においてアリストテレス的であると特徴づける。⁽¹³⁾

第一に、われわれは道德の理論化にあたっては、道德的行為者の自己理解によって導かれなければならないという、アリストテレス的なエンドクサ（日常的知見）の重視する点において。アリストテレスと同様に、スミスも日常経験が同感メカニズムによる反省によって精錬されていかなければならないと考えている。

第二に、スミスは、われわれは外的パースペクティヴからは倫理を理解できないと考えている意味において。スミスは倫理学へのアリストテレス的アプローチについてその説得的性格を肯定している。アリストテレスはわれわれに「行為様式に関する快い生き活きた描写」を示すことで、さまざまな徳と悪徳を描いて見せた。そしてそれらは一部には倫理的に判断するわれわれの力を涵養し、それによって間接的にわれわれが倫理的であるよ

うに助力する。「こうした方法で道德の諸規則を取り扱うことによって適切に倫理学と呼ばれる学問が成立する。この学問は芸術批評と同様に、もっとも厳密な正確さを示すわけにはいかないかもしれないが、しかし非常に有用であると同時にまた非常に好ましい学問である」

第三に、スミスは倫理学における厳密さの基準を斥けている意味でアリストテレスに接近している。スミスの場合、正義を例外としてその他の徳ないし義務を判定するための規則が存在するとは考えられていない。周知のようにスミスは決疑論者に対して正義の規則を範型にして正確な道德規則を確立しようとするのを、あたかも文法家のようなものとして批判する。スミスによれば正義以外の道德的諸徳にかんする規則は「緩やかで、曖昧で精確ではない」規則である。「評論家が創作における崇高なもの、ないし優美なものに到達するために設定するような諸規則、したがってそれはわれわれに対して」われわれがめざさなければならない、完全性を獲得する上の何らかの確実な、まごうことのない指令を与えるというよりは、むしろそのような完全性に関する一般的な観念を与えるような諸規則である。」⁽¹⁴⁾

さてこのようにスミスの道德の理論化へのアプローチのいくつかの特徴を見てきたうえで、さきに保留した『道德感情論』の論述体系における第7部の位置の問題にたちかえろう。すでにのべたように、第1部より第6部までにおいては、「われわれ」が道德行為者の立場で当事者としてあるいは観察者としての日常的なさまざまの経験を同感という感情的増埒の中で精錬させられ、反省させられて、さまざまな徳性に高められていく様が描かれてきたが、そうした光景が、第7部において突如一変して、「われわれ」は道德哲学者として、これまでの哲学者たちの道德に関する見解の歴史的、批判的論評の形をとった理論的パースペクティブからこれまでの道德的経験を読者に振り返させながら総括する。このような『道德感情論』の論述における日常的な道德行為者の自己理解という実践的な視点から理論的視点への転換の問題は、スミスが道德の言説化にあたって、彼自身が批判した哲学者たちの陥った陥穽を避けながらも、道德哲学者としての理論的視点は日常的な現実生活にどのようなかわり方をとるべきだと考えたのかという問題を提起してくるのである。

2. 批評家と劇場

スミスが古代の道德哲学者たちをその道德への関わり方において批評家として喩え、決疑論者たちを文法家に喩えたことはすでに見た。(さらに近代の自然法学者たちも彼らがあたかも正義を徳のパラダイムであるかのごとくみなしたことから文法家に組み入れられている。) グリswォルトは、上に提起した問題に対していくつかの鍵を提供してくれるものとして、このスミスの文法家と批評家という類比にわれわれの注意を向けさせる。スミスによれば、古代の道德哲学者たちが—アリストテレスとキケロが例として挙げられているが—批評家の部類に喩えられるのは、道德についての彼らの扱い方が次のようであったからであるとしている。

- ① 彼らは「さまざまな種類の徳や悪徳を一般的な方法で記述することに満足し、…あらゆる特定の場面に当てはまるような多くの厳密な原則を制定しようとはしなかった」。

- ② 彼らは「言語の確定能力の許すかぎりにおいて、まず第一に、それぞれ特定の徳の基礎をなしている心の情操がどこに存するか、…あらゆる徳の本質を形成するのはいかなる種類の内的感情ないしは情緒であるか、…悪徳の本質を形成するものはいかなる内的感情ないしは情緒であるか、ということを確認め、第二に、このような各種の情操がわれわれをその方向へ導いてくれるはずの一般的な行動様式…とはいかなるものであるか…を確認めようと努めたにすぎない。」
- ③ このように「それぞれ特定の徳の基礎をなしている内的情操の特徴をあきらかにするためには、繊細であるとともに厳密な筆致を必要とするけれどもそれはある程度まで精確に進行しうる仕事である」。けれども「それぞれの情操があらゆる可能な状況の変化に応じてこうむらざる終えないすべての変化を表現すること」はできない。
- ④ そのような一般的な描写は多くの点において不完全であろうけれども「われわれがそれに出会った場合に、われわれに原型のいかなるものであるかを知らせ、…かなりの類似性を有する他の情操から区別するくらいの度合いの類似性を原型に対して持つことができる」
- ⑤ 「われわれがそれぞれの徳に促されて行おうとする日常の行動様式がいかなるものであるかを、一般的な方法で記述すること」は、「このような行動様式の基礎となっている内的な情操もしくは情緒を記述」する上に欠かせない。なぜなら「情感のあらゆる多様な形態の、いわば見えざる姿をそれが心の中で表れるがままに言葉でもって表現することは不可能であるからである。それらの見えざる姿をはっきりと示し、互いに識別するためには、それらのものが外部へ産みだす諸結果、すなわちそれらの情感の変形が顔つきや、態度ないし外的行動などの上に起させる変化、それらのものが暗示する決意、それらのものが促す動作などを記述する以外に方法はない」からである。
- ⑥ このような方法にしたがって、アリストテレスは「倫理学」において「われわれが自己の行動を規制するための準拠として、種々の習慣を指示」したし、キケロはその『義務論』において「われわれに四つの基本的美徳を実行させるよう指導しようとした」。
- ⑦ 「それらの著作は、われわれに行動様式に関する快い生き活きとした描写を提供する」ために「徳に対するわれわれの自然の愛情を掻きたて、悪徳に対するわれわれの嫌悪の情を増大させる。」「その観察が正しいと同時に精緻であるために、しばしば行為の適正に関するわれわれの自然の情操を修正すると同時に確定し、そしてわれわれに多くの深いしかも精緻な注意をはらうように暗示を与えることによって、もしもそのような教示がなかった場合にわれわれの思いつきやすい正しい好意よりもはるかに厳密な正しい好意を行わせるようにわれわれを訓練する上に役立つことができる」こうした方法で成立した本来の「倫理学」は「芸術批評と」同じであり、「すべての他の学のうちでも修辞上の文彩の影響を最も受けやすく、したがって修辞上の文彩によって、最も小さな義務の原則に対して新しい重要性を与えようと思えばできないことはない。」⁽¹⁵⁾

以上が、古代の道德哲学者たちの倫理学のあつかい方に関するスミスの評価であるが、こうした評価から、グリスウォルトは、スミスが構想していた道德の理論化が、彼が古代

倫理学の記述様式を上述のように特徴づけたような「批評家」としての働きに属するものであるという。そしてかれは、そのような「批評家」としての哲学者は、次のような三つの仕事をするという。⁽¹⁶⁾

第一に、批評家は彼が観察する光景を記述して、それをできるかぎり生き活きと、想像作用を通して他者がその光景を「見る」ように伝えることである。

第二に、批評家はふるまいを、それらの一貫性や、それらを一つの統一あるまとまった行為に結びつける原則、あるいは事件の意図などを考察したり、分析したりすることである。そうすることによって批評家はわれわれを教育するために対象を見る適切な見方、対象への没入の正しき仕方などに関して記述する。

第三に、批評家は行為を評価する。そのような批評家は、二つの可能な基準のうち、人類が到達できそうもないような「完全な適正と完成」の観念ではなく、「このような完全無欠の状態に近づいている、あるいは遠ざかっているが、しかし大部分の人間の行為が普通それに到達できる程度の完全性の観念」にもとづいて規範的な評価する。

スミスはどのような種類の批評が最適なものかについてはあきらかにしていないが、グリスウォルトは、スミスが人生を上演中の光景と比較していることや、演劇に対する彼の熱心な関心などを考えるならば、それは〈劇評〉であろうと推定する。スミスの道德感情の理論化における〈劇場性〉の中心的な意義については、すでにディヴィット・マーシャルが着目し、主題的に論じている。グリスウォルトも彼にならって〈劇場性〉を重視する。⁽¹⁷⁾ グリスウォルトの指摘するように、社会生活における行為者と観察者の織り成す道德的世界を理論家として、しかもその外側から達観的に描くのではなく、その内側から個別的な道德的現象を救い上げながら描くというスミスの構想を考えるならば、〈人生という劇場〉と、その上で上演される〈演技者（行為者）〉とそれを同感を交えながら観る〈観客（観察者）〉、さらにはその演技者の観客へのアピールと観客の反応との共鳴具合を少し高い席より見守る〈批評家〉とからなる〈演劇〉というメタファーこそ道德を理論化する上にまさに最適のモデルといえよう。⁽¹⁸⁾

グリスウォルトは、劇場と劇批評家のメタファーが人間の道德世界および道德哲学者＝理論家の立場についてのスミスの考えにいかにか適しているかについて、次のような点を指摘する。

第一に、演劇という構想は、もつれ合い互いに結びつかないように思える諸事象の連続のなかに一つのまとまったパターンを思い浮かばせる。そしてそれらの背後にある「本質」や「実体」などのような形而上学的、ないしは認識論的な議論に入り込まずにその特徴について語る事ができる。

第二に、劇評家が劇場内においてドラマの登場人物と観客の双方を観察し評価して、批評を書くかぎりにおいて彼が道德行為者、反省的な道德行為者であるように、理論家も反省的な道德行為者である。

第三に、批評家は客観的に、距離をおいた離間的立場をとるが、その客観性は劇場の外での立場からではない。その客観性は距離をとってはいるが、相対的なそれであって全くの離脱や超越ではない。批評家の公平さは、注意深い観察や分析と反省をとおして自身の評価を精練する能力とその分野についての歴史的知識に負うのである。

グリスウォルトの指摘にしたがって、『道德感情論』の記述構成をふりかえってみるな

らば、そこには〈人生という劇場〉で演じられている一つのドラマが展開されていると思える。第一部で、カーテンが開きドラマが始まる。「われわれ」は観客としてみているうちに登場人物の演技に同感しそこに引き込まれ、演技者の立場に立ってみたり、観客に立ち返ったりしながら、演劇を体験する。そうして最後には批評家の批評に耳を傾けて、そのドラマとその体験をより深く、より広い見方で味わい直すのである。

批評家、それも演劇批評家に類比される道徳哲学の理論家の仕事はこの意味でレトリックを本質的に要請するのである。

しかしさらに次のような問題が浮かび上がってくる。このように批評家としての理論的立場の位置づけによって、第7部の位置がある程度、理解できたにしても、どのような意味で第7部は存在しなければならないのか、ということである。スミスは第7部を書いたことによって、われわれは反省的な道徳行為者の地平の内側には完全にはとどまっていられないということをもとめているのではないだろうか。

- (1) C.L.Griswold.Jr. 'Rhetoric and Ethics; Adam Smith on Theorizing about the Moral Sentiment', *philosophy and Rhetoric*, Vol.24, No. 3, 1991. pp.217-219. および *Adam Smith and the Virtues of Enlightenment*, Cambridge, 1999. pp48-55.
- (2) C.L.Griswold.Jr. 1991, p.216, 1999, p.48.
- (3) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, ed D.D.Raphael and A.L.Macfie, Oxford 1976. (以下、TMSと略す) IV.2.2 p.188, アダム・スミス『道徳情操論』米林富男訳、未来社、1980, (下) p.401 (以下、邦訳の引用箇所は6版に依拠した米林訳のページを示す。ただし引用に際しては訳文を適宜、原文に照らして修正してある)
- (4) TMS VII. 3 .intro. 3 p.315, 邦訳 (下) p.660.
- (5) C.L.Griswold.Jr. 1991, p.218
- (6) TMS VII.ii.2.14. p.299, 邦訳 (下) p.625.
- (7) TMS VII.ii.1.41 p.291, 邦訳 (下) p.602.
- (8) TMS VII.ii.1.4. p.317, 邦訳 (下) p.664.
- (9) TMS VII.ii.1.2, p.316, 邦訳 (下) p.662.
- (10) TMS VII.ii.1.39, p.289, 邦訳 (下) pp599-600.
- (11) TMS I .i.4.4. p.20, 邦訳 (下) p.65.
- (12) TMS IV.2.2. p.188, 邦訳 (下) p.401
- (13) C.L.Griswold.Jr. 1991, p.220, 1999, p.57.
- (14) TMS VII.ii.1. p.327, 邦訳 (下) p.683.
- (15) TMS VII.ii.3-6. pp.328-329, 邦訳 (下) pp.684-686.
- (16) C.L.Griswold.Jr. 1991, p.221, 1999, p.64-65.
- (17) David Marshall, 'Adam Smith and the Theatricality of Monal Sentiments', in *The Figure of Theater - Shaftesbury, Defoe, Adam Smith, and Geoge Eliot*, New York , 1986, pp.167.chap. 7.

マーシャルはこの著作で、デュ・ボス、シャフツベリー、ヘンリー・ヒューム (ケイムズ)、等の18世紀の文芸批評やデウォーの小説における〈劇場〉の隠論の中心的な

たらきとその影響史的パースペクティブからスミスやG.エリオットの『ダニエル・デロンダ』における同感概念の〈劇場性〉を論じている。Jean - Pierre Dupuyも、このマーシャルに依拠して、スミスの同感の論理を〈劇場性〉の観点で分析している。ジャン・ピエール・デュピュイ、『犠牲と羨望—自由主義社会における正義の問題』、米山親能／泉谷安親 訳 法政大学出版局、2003年。 p.93～p.136 参照

(18) C.L.Griswold,Jr. 1999, p.68.